

ダンスの「発表」が気分・感情に及ぼす影響 — 体育専攻学生を対象とした検討 —

梶ちか子¹⁾、長野真弓²⁾、松崎守利³⁾

¹⁾鹿屋体育大学、²⁾京都文教大学、³⁾九州女子短期大学

キーワード: ダンス、発表、授業経験、男女差

【要 旨】

ダンスの学習過程において、授業の成果・まとめとして「発表」の活動が取り入れられることが多い。しかし、「発表」の体験が、学習者の実際の気分や感情にどの程度影響しているのかは明らかではない。そこで本研究ではダンスの「発表」前後での受講者の気分や感情の変化を検討した。

対象は体育系大学の「創作ダンス」受講生 59 名であった。授業は全 16 回で、第 1 回目の授業時と第 15 回目の発表前、第 16 回目の発表後に、ダンスの好嫌度、ダンスに対するイメージ・気分・感情について、質問紙調査を行った。その結果、ダンスの好嫌度は、ダンス「発表」の体験によって影響は受けにくい可能性が示唆された。また、ダンス「発表」の体験は、ダンスに対するポジティブなイメージをより上昇、ネガティブなイメージを低下させ、さらに、「自己」や「他者とのかかわり」、「創造活動」に関わる感情を上昇させる可能性が示唆された。また、ダンスの好嫌度やダンスに対するイメージ・気分・感情にはダンス授業の受講経験や男女差が影響を与える可能性が示唆された。

従って、本研究を通して、ダンスの「発表」体験が、学習者の様々な気分や感情に好影響を与える可能性が示唆された。

スポーツパフォーマンス研究, 6, 143-160, 2014 年, 受付日: 2013 年 12 月 26 日, 受理日: 2014 年 8 月 7 日
責任著者: 梶ちか子 〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1 chichicaco@ninus.ocn.ne.jp

Influence of dance presentations on the feelings and emotions of university physical education students

Chikako Kakoi¹⁾, Mayumi Nagano²⁾, Moritoshi Matsuzaki³⁾

¹⁾National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

²⁾Kyoto Bunkyo University

³⁾Kyushu Women's Junior College

Key Words: dance, dance presentation, experience taking dance lessons,

gender differences

[Abstract]

When students are learning to dance, a dance presentation is often conducted so as to sum up the lessons of that class. However, it is not clear how the experience of presentation affects the students' feelings and emotions. The present study examined changes in the feelings and emotions of dance students before and after the presentations. The participants were 59 university physical education students who were taking a series of 16 creative dance lessons. At the first lesson, before the 15th presentation, and after the 16th presentation, the students completed a questionnaire asking whether they liked or disliked dance, and also asking about their image, feelings, and emotions relating to dance. The results suggested that whether students liked or disliked dance was not affected significantly by the experience of doing a presentation. Also, doing a presentation appeared to increase the students' positive image of dance, decrease their negative image, and increase their emotions in relation to themselves and other persons, as well as their emotions associated with creative activity. The results also suggested that the feeling of liking or disliking, their image of dance, and their feelings and emotions relating to dance were affected by taking lessons and were different depending on the students' gender. It is suggested that the experience of dance presentation may have a positive influence on students' feelings and emotions.

I. 緒言

平成 20 年 3 月告示の新学習指導要領(文部科学省、2008a)において、保健体育は、授業時間数が現行の 90 単位時間から 105 単位時間へと増やされた。そして、生涯スポーツの観点より、より多くの領域のスポーツを経験させることが望ましいことから、中学校では、「ダンス」においても男女必修で履修させることとなった。施行は平成 21 年からであり、平成 23 年度までを移行期間とし、平成 24 年度より男女必修・完全実施となっている。

学習指導要領解説(文部科学省、2008b)によると、ダンスの学習過程において、授業の成果・まとめとして、動きを見せ合う「発表」を積極的に行うよう示されている。松本(1992)は、『ダンスの教育学』の中で、ダンス学習における発表と鑑賞について「自作、他作の発表の場は、自作のできればえを内観しつつ実現し、他作には眼をひらき、心をひらいて作者の意図をうけとめる—いわゆる発現と享受の場である」と記している。それ故、ダンスの学習においては、「踊る」「創る」だけではなく、「発表」の場で行われる「観る」の 3 つの体験を通して行われると考えられる。

麻生(1992)は、学生を対象とした調査の中で、授業成果のまとめとして行った「発表会」までの過程を経験したほとんどの学生が「学習のまとめとして」「学習内容の豊かさ」などを根拠にダンスの学習において発表会の必要性や位置付けを肯定的に捉えるようになり、その過程で仲間と共同して目的遂行することや友人関係の深化などを好ましい結果として受け止めていると報告している。また、千住(1994)は、エアロビックダンスにおける初心者が発表の機会をもつことの意味について、同じ動きに取り組む姿勢がより積極的なものとなり、見られる対象としての自己と同時に見る対象としての自己認識が生まれ、多くの人間の協力を得て作品を仕上げる過程を通して、個で感じていたものが集団の中でさらに強く意識させられると述べている。

このように、授業のまとめとしての「発表会」を行うまでの取り組みも含め、ダンス学習において「発表」を行うことは、肯定的に捉えられており、また、自他のグループの互いの違いや良さを認め合い、達成感が得られる体験であると考えられる。しかし、実際に、ダンスの「発表」を行うことが、受講者自身の気分や感情にどの程度影響しているのかは明らかではない。ダンスの「発表」体験前後の受講者の気分・感情の変化を検証することで、ダンス授業実践における「発表」実施の意義をより明確に提示できると共に、ダンスの「発表」を通して身に付けることができる力や新たな可能性についても示すことができると考えられる。

筆者が担当する体育系大学の「創作ダンス」の授業では、基礎的なダンス技術を習得し、その指導法と発表技法を身に付けることをねらいとし、全 16 回の授業の最後に、学内にある講堂で授業の成果を発表する場として、「創作ダンス発表会」を実施している。学習指導要領の改定で、中学校で「ダンス」が男女必修化された背景もあり、受講している学生の多くが中学や高等学校の教員免許の取得を希望している。大学時代のダンス授業履修経験が、指導の際の実技力を左右するという報告(山崎、2013)からも、大学のダンス授業充実に向けて、授業成果を様々な観点から検証することは重要であると考えられる。そこで、本研究では、体育系大学における「創作ダンス」授業内での「発表」前後での受講者の気分や感情の変化を検討し、ダンス授業実践における「発表」の

意義について、基礎的資料を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

対象は体育系大学における平成 24 年度「創作ダンス」受講生 59 名(男子 31 名、女子 28 名)であった。「創作ダンス」の授業は、基礎的な実技力を身に付けるための関連実践科目の中の選択科目であり、3 年次以降の学生が、授業選択に関するオリエンテーションを受講後、選択履修する。授業内で、調査に関するアンケートの内容が授業評価(成績)には反映されないことを確認の上、結果のみを論文や報告書などで公表することがあることを前提に、口頭・書面にて調査研究・映像取扱いの了承を得られた学生に関して、アンケート結果を採用した。

2. 調査手順

「創作ダンス」の授業は、全 16 回で、授業内容は表 1 の通りであった。学習指導要領の改定で、中学校で「ダンス」が男女必修化されたことから、授業では、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」を取り扱った。16 回目の授業で行った「創作ダンス発表会」は、個人のグループで創作したオリジナル作品と受講生全員による全体作品 2 作品(現代的なリズムのダンス・創作ダンス)から構成されており、受講生全員が 3 作品(グループ創作 1 作品+全体作品 2 作品)に出演した。15 回目と 16 回目の授業は、普段、授業を行っているダンス練習室ではなく、学内の講堂の大ホール(560 名収容)で、アナウンス、音響、照明を用いて行った。なお、「創作ダンス発表会」当日の観客は、大学内の教職員と学生であり、舞台上で作品を踊っている以外の学生は客席で鑑賞することとした。

表 1. 授業「創作ダンス」全 16 回の授業内容

| 授業科目名 | 創作ダンス | | 授業形態 | 実技 | 授業科目区分 | 専門科目 (関連実践科目) | |
|----------------------|---|---|--|---------|---------------------------------|------------------|---------|
| 担当教員名 | かこい 裕 ちか子 (非常勤講師) | | | 補助担当者名 | | | |
| 単位数 | 1 単位 | 履修年次 | 3 年次 | 受け入れ人数 | 40 名程度 | | |
| 授業の概要 | 表現運動・ダンス領域は、社会におけるダンスの広がりに対応し、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」から構成され、小・中・高校において発達段階に対応した内容で構成されている。表現運動・ダンスの学習では、幅広いダンスに触れ、生涯学習の観点からも、ダンスを自発的に楽しむ力を育成することがねらいとなる。本授業では、基本的な身体の動きやステップ、シンプルな動きを発展させた創作・身体表現から、イメージからの即興表現、作品創作まで、段階的に表現能力の向上を図る。これにより、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」の基礎的な技術を習得し、その指導法と発表技法が身に付くことが期待される。 | | | | | | |
| 授業の到達目標 及び成績評価の方法 | 授業の到達目標 | | | 成績評価の方法 | | | |
| | | | | 授業期間 | | 定期 | その他 |
| | | 授業 | テスト | レポート | 発表 | 試験 | () (%) |
| | ■ 認知的領域 | ・ダンスの「課題解決学習」について理解することができる。 ・ダンスの基礎技術、指導法、発表技法について理解することができる。 | | | | ○ | 20 |
| ■ 情意的領域 | ・主体的かつ積極的に課題へ取り組むことができる。 ・仲間と協力して、作品創作に取り組むことができる。 | ○ | | | ○ | 30 | |
| ■ 技能的領域 | ・基本的な身体動作やステップを習得し、恥ずかしがらず、身体全体を使って、楽しくダンスを踊ることができる。 ・テーマに即した身体表現・作品創作・発表ができる。 | ○ | | | ○ 作品発表 | 50 | |
| 成績評価の基準 | 作品発表（定期試験）を必ず行うという条件で、出席状況、授業態度、レポート、ミニ発表、作品発表（定期試験）の各得点を合計し、60点以上のものを合格とする。 | | | | | | |
| テキスト、教材参考書 | 適宜提示する。（毎時間、資料プリントを配布） | | | | | | |
| 履修条件・関連科目 | | 備考（教員メッセージ含む） | 学習指導要領の改訂により、中学校においてダンスの授業が男女必修となり、教員採用試験で男女共通の必修課題としている県や市が増えている。ダンスはその特性上、未経験のまま教育実習や採用試験を受験することは難しいため、教職を希望する学生は、男女を問わず、積極的に受講することを勧める。 | | | | |
| オフィス・アワー | | | | | | | |
| 授 業 計 画 | | | | | | | |
| 回 | 担当教員名 | 授 業 内 容 | | | 授業時間外の指導等 (予習、復習、レポート等課題の指示) | | |
| 1 | かこい 裕 ちか子 | オリエンテーション (授業の進め方、ダンスの特性について、成績評価等) | | | | | |
| 2 | 〃 | ダンスの基礎練習 (ダンスの導入・ウォーミングアップ、交流ダンス) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 3 | 〃 | 現代的なリズムのダンス① (リズムに乗って、基本の動きを学ぶ) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 4 | 〃 | 現代的なリズムのダンス② (リズムの特徴をとらえた動きとその発展) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 5 | 〃 | 現代的なリズムのダンス③ (リズムに変化・まとまりを付けて踊る) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 6 | 〃 | 創作ダンス① (身近な生活や日常動作、スポーツ動作から) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 7 | 〃 | 創作ダンス② (はこびとストーリー) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 8 | 〃 | 創作ダンス③ (もの・道具を使って) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 9 | 〃 | 創作ダンス④ (多様な感じ、音楽から) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 10 | 〃 | フォークダンス (外国のフォークダンス、日本の民謡) | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 11 | 〃 | 創作活動の基礎 (群構成、空間の使い方、上演法など)、グループ分け | | | WebClassの映像から授業ノートを作成 | | |
| 12 | 〃 | 作品創作① (グループ、個人作品の創作活動) | | | 作品創作時に使う音楽・衣装の準備 | | |
| 13 | 〃 | 作品創作② (グループ、個人作品の創作活動) | | | 作品創作時に使う音楽・衣装の準備 | | |
| 14 | 〃 | 作品創作③ (グループ、個人作品の創作活動) | | | 作品創作時に使う音楽・衣装の準備 | | |
| 15 | 〃 | 作品創作④ (グループ、個人作品の創作活動)、作品発表リハーサル | | | 作品創作時に使う音楽・衣装の準備 | | |
| 16 | 〃 | 学期末試験 : 作品発表 | | | | | |

授業 1 回目のオリエンテーション時(授業前)に、ダンス授業の受講経験、ダンスの好嫌度、ダンスに対するイメージ(楽しさ、生き生きする、頭が混乱する、緊張、恥ずかしさ)を調査し、第 15 回目の授業時(発表前)にダンスの好き嫌い、ダンスに対するイメージ調査と原田(2006)の作成した舞踊の感情昇華に関する質問紙調査を実施した。第 16 回目の授業時(発表後)にも第 15 回目と同様の調査を実施した(図 1)。

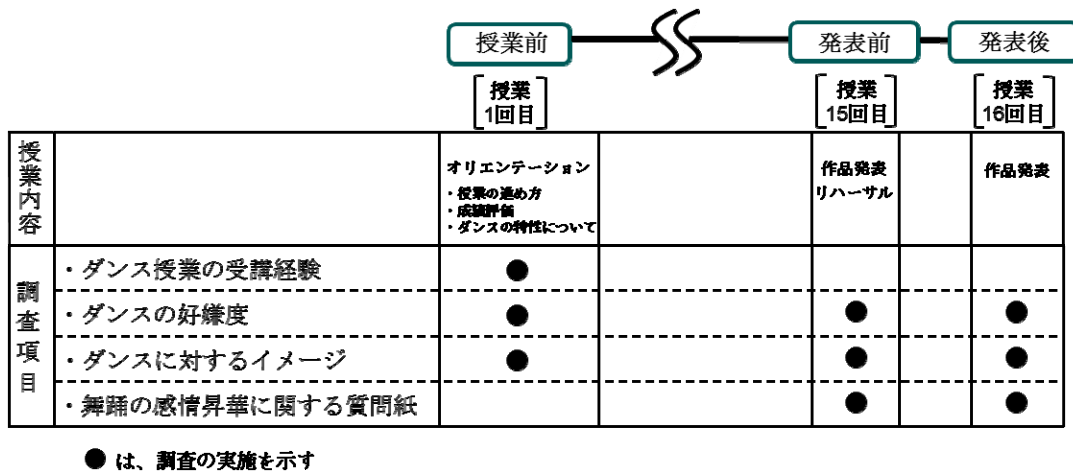


図 1. 調査プロトコール

3. 調査項目

(1)ダンス授業の受講経験

小学校から高校までのダンス授業の受講経験の有無について調査した。

(2)ダンスの好嫌度

①ダンスを踊ること、②ダンスを創ること、③ダンスを観ることについて、とても好き(1)ーまあまあ好き(2)ーふつう(3)ーあまり好きでない(4)ー嫌い(5)の 5 件法にて回答させた。

(3)VAS (Visual Analogue Scale)を用いたダンスイメージ感情に関する評価

ダンスのイメージ感情に関する評価には、数直線状の左端をゼロ、右端を最大として、気分などの心理状態を回答する手法である、VAS (Visual Analogue Scale)を用いて、「楽しさ」「生き生きする」「頭が混乱する」「緊張」「恥ずかしい」の 5 項目について調査した(図 2)。

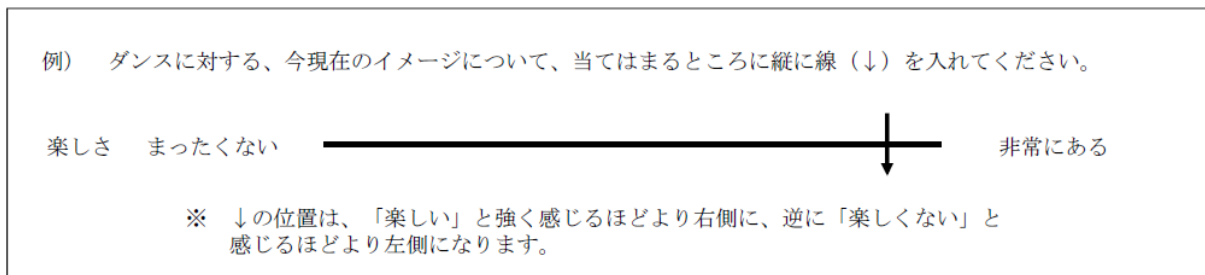


図 2. VAS を用いたダンスに対するイメージ調査の一例

(4) 舞踊の感情昇華に関する質問紙(原田、2006年)を用いた気分・感情評価

表2に示す項目について、全くそう思わない(1) - そう思わない(2) - どちらでもない(3) - そう思う(4) - 大変そう思う(5)の5件法にて回答させた。

表2. 舞踊の感情昇華に関する質問紙の内容 (原田(2006)整理したもの)

| 分類 | カテゴリ | 質問番号 | 質問項目 |
|---------|-----------|---------------------------------|--------------------------------|
| 自己 | 緊張 | 1 | 皆が見ている前で動くのは緊張した |
| | | 7 | 身体を大きく動かすのは恥ずかしかった |
| | | 13 | 恥ずかしがらずに気持ちよくなった |
| | 動きと身体と | 3 | 身体を十分に動かすことができた |
| | | 9 | 身体を動かすことにぎこちなさを感じた |
| | | 19 | 身体を動かすことが楽しいと感じた |
| | 動きと表現と | 2 | 自分の気持ち(考え)を十分に動きで表現できた |
| | | 8 | 自分を思い切り出すことができた |
| | | 14 | 動きで表現することが気持ちよかった |
| | 昇華・浄化 | 4 | 日頃のストレスが発散できた |
| | | 10 | 自然と笑顔になっていた |
| | | 15 | 踊り終わったあとは爽快感を感じた |
| | | 16 | 自分の内にたまったものを外に出す(浄化する)心地よさを感じた |
| 他者とのかわり | 創場の | 20 | このクラスでは自分の自由な表現を受け容れてもらえる |
| | | 23 | このクラスでは自由に自分を出すことが保障されている |
| | 他者への意識 | 22 | 他者の表現の中に生き生きとした躍動感を感じた |
| | | 24 | 他者の動きの中に「その人らしさ」を感じた |
| | | 25 | 他者の動きの中に、その人の「喜び」を感じた |
| | コミュニケーション | 5 | 一緒に動くことで、知らなかった人にも親近感が持てた |
| | | 11 | 一緒に動いた人と、動きを通して気持ちが通じ合ったと思う |
| 17 | | 相手の動きを感じ取ろうとした | |
| 21 | | 自分の身体や動きを通して、人に何かを伝えることができると感じた | |
| 創造活動 | 創造 | 6 | 動きを工夫する楽しさを感じた |
| | | 12 | 他のグループにはないものを創ろうと努力した |
| | | 18 | 自分(達)らしさを表現する楽しさを感じた |

III. 統計解析

ダンスの好き嫌い、VASを用いたダンスイメージ感情に関する評価については、授業前・発表前・発表後の3時点で、舞踊の感情昇華に関する質問紙を用いた気分・感情評価については、発表前・発表後の2時点で、一元配置の分散分析(ANOVA)を行い、変動パターンについて検討した。授業前、発表前と発表後の値の比較には、Bonferroniの多重比較を用いて解析した。また、ダンス授業経験、男女差について、各時点でt検定、変動パターンについてANOVAを用いて解析した。全ての値は、平均値±標準偏差で示した。なお、統計ソフトは(株)SPSS社製SPSS Ver. 16を使用し、いずれも有意水準は、両側検定で5%未満とした。

IV. 結果

1. 対象者の基本特性およびダンス経験

表 3 は、対象者の基本特性を示している。表 4 は、ダンス授業の受講経験を示し、女子が 8 割以上の学生が受講経験ありと答えたのに対し、男子は約 3 割にとどまり、男女で有意な差が認められた ($\chi^2=13.117$, $df=1$, $p < 0.01$)。

表 3. 対象者の基本特性

| 対象 | 項目 | 平均 | ± | SD |
|--------------|--------|-------|---|------|
| 全体 (n=58) | 年齢(歳) | 21.0 | ± | 1.5 |
| | 身長(cm) | 166.1 | ± | 7.9 |
| | 体重(kg) | 64.0 | ± | 11.4 |
| 男子 (n=31) | 年齢(歳) | 21.0 | ± | 1.7 |
| | 身長(cm) | 170.9 | ± | 5.9 |
| | 体重(kg) | 67.9 | ± | 11.1 |
| 女子 (n=28) | 年齢(歳) | 21.0 | ± | 1.4 |
| | 身長(cm) | 160.9 | ± | 6.4 |
| | 体重(kg) | 57.3 | ± | 8.7 |

表 4. ダンスの授業経験

| 対象 | あり | なし |
|----|------|------|
| 全体 | 57.6 | 42.4 |
| 男子 | 35.5 | 64.5 |
| 女子 | 82.1 | 17.9 |

p < 0.001

(単位: %)

2. 発表前後の気分・感情の変化

(1) ダンスの好嫌度

図 3 は、ダンスの好嫌度について示している。①ダンスを踊ること、②ダンスを創ること、③ダンスを観ることの全ての項目において、授業前と発表前後の値に有意差が認められた ($p < 0.01$) が、発表前後では有意差は認められなかった。

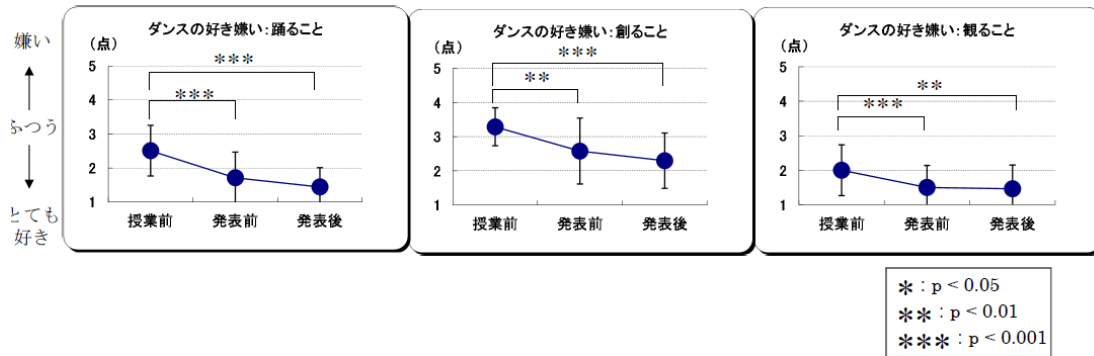


図 3. 受講生全員(全体)におけるダンスの好嫌度の推移

また、表 5 はダンス授業経験別に分析した結果を示している。授業前、発表前、発表後を通して、ダンス授業経験ありと答えた学生の方が、どの項目においても、ダンスが好きである傾向が強く、「踊ること」について発表前 ($p = 0.035$) と発表後 ($p = 0.04$) に、「観ること」について「授業前」 ($p = 0.032$) と「発表後」 ($p = 0.005$) に明らかな差が認められた。また、「創ること」において、ダンス授業経験のない学生においては、授業前、発表前、発表後の変動が認められなかった。「観ること」においては、ダンス授業経験ありの学生となしの学生で、変動パターンに有意な差が認められた ($p = 0.025$)。

表 5. ダンス授業経験別におけるダンスの好嫌度の推移

| ダンスの好き嫌い | 授業経験 | 授業前 | 群間差 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 授業前 vs 発表前 | 授業前 vs 発表後 | 発表前 vs 発表後 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|----------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|--------------|---------------|
| 踊ること | あり | 2.4 ± 0.7 | n.s. | 1.5 ± 0.6 | p = 0.035 | 1.3 ± 0.5 | p = 0.04 | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | n.s. |
| | なし | 2.7 ± 0.7 | | 2.0 ± 0.9 | | 1.6 ± 0.7 | | p < 0.002 | p = 0.001 | n.s. | p = 0.002 | |
| 創ること | あり | 3.3 ± 0.6 | n.s. | 2.3 ± 0.9 | n.s. | 2.1 ± 0.8 | n.s. | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | n.s. |
| | なし | 3.3 ± 0.5 | | 2.9 ± 1.1 | | 2.5 ± 0.9 | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | |
| 観ること | あり | 1.8 ± 0.7 | p = 0.032 | 1.4 ± 0.6 | n.s. | 1.3 ± 0.4 | p = 0.005 | p = 0.011 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | p = 0.025 |
| | なし | 2.2 ± 0.7 | | 1.6 ± 0.7 | | 1.8 ± 0.9 | | p = 0.040 | n.s. | n.s. | p = 0.014 | |

(平均値±標準偏差)

表 6 は、男女別に分析した結果を示したものである。授業前、発表前、発表後を通して、女子学生の方が、どの項目においても、ダンスが好きである傾向が強く、「踊ること」の「授業前」 ($p = 0.01$) 「発表前」 ($p = 0.035$)、「観ること」の「授業前」 ($p = 0.004$) 「発表後」 ($p < 0.001$) で明らかな差が認められた。また、「観ること」においては、男女で、変動パターンに有意な差が認められた ($p = 0.025$)。

表 6. 男女別におけるダンスの好嫌度の推移

| ダンスの好き嫌い | 性別 | 授業前 | 群間差 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 授業前 vs 発表前 | 授業前 vs 発表後 | 発表前 vs 発表後 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|----------|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|--------------|---------------|
| 踊ること | 男 | 2.7 ± 0.7 | p = 0.01 | 2.0 ± 0.9 | p = 0.035 | 1.6 ± 0.6 | n.s. | n.s. | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | n.s. |
| | 女 | 2.3 ± 0.7 | | 1.5 ± 0.5 | | 1.3 ± 0.5 | | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | |
| 創ること | 男 | 3.3 ± 0.5 | n.s. | 2.7 ± 0.9 | n.s. | 2.3 ± 0.8 | n.s. | n.s. | p = 0.036 | n.s. | p = 0.007 | n.s. |
| | 女 | 3.3 ± 0.7 | | 2.5 ± 1.0 | | 2.3 ± 0.8 | | p = 0.009 | p = 0.001 | n.s. | p < 0.001 | |
| 観ること | 男 | 2.3 ± 0.8 | p = 0.004 | 1.7 ± 0.7 | n.s. | 1.8 ± 0.8 | p < 0.001 | p = 0.036 | n.s. | n.s. | p = 0.013 | p = 0.025 |
| | 女 | 1.7 ± 0.6 | | 1.3 ± 0.6 | | 1.1 ± 0.3 | | p = 0.006 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | |

(平均値±標準偏差)

さらに、ダンス授業経験があると答えた学生(34名)を対象に、男女別(男子:11名、女子23名)に同様の分析を行ったところ、授業前、発表前、発表後のそれぞれの時点での値、変動パターンに男女差は認められなかった。

(2)ダンスイメージ感情に関する評価

図4・5は、ダンスに対するイメージについて示したものである。「楽しさ」「生き生き」の項目が、授業前と比較して、発表前・発表後に有意に上昇しており、発表前と比較して発表後にも有意な上昇が認められた($p < 0.05$)。「混乱」については、授業前と発表後、発表前と発表後($p < 0.01$)に、「緊張」「恥ずかしさ」の項目については、授業前と発表前後の値に有意差が認められた($p < 0.01$)。

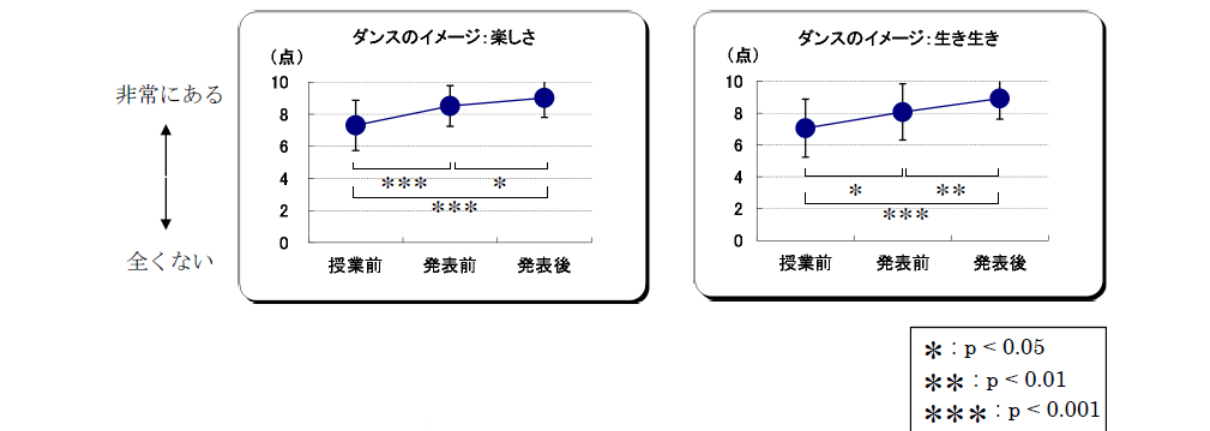


図4. ダンスイメージの推移(楽しさ・生き生き)

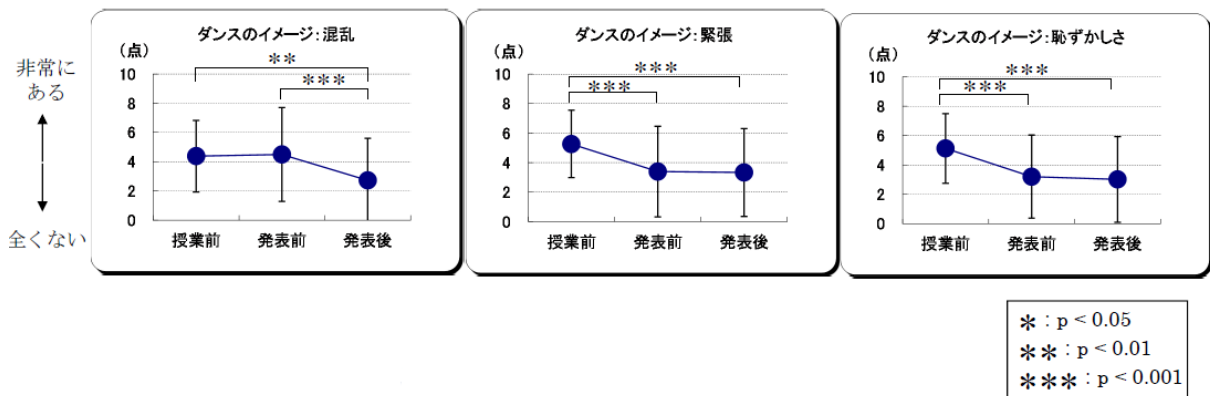


図5. ダンスイメージの推移(混乱・緊張・恥ずかしさ)

また、表7はダンス授業経験別に分析した結果を示している。授業前、発表前、発表後のそれぞれの時点での値、変動パターンにダンス授業経験による差は認められなかった。

表 7. ダンス授業経験別におけるダンスのイメージの推移

| ダンスイメージ | 授業 経験 | 授業前 | 群間差 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 授業前 vs 発表前 | 授業前 vs 発表後 | 発表前 vs 発表後 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|---------|----------|-----------|------|-----------|------|-----------|------|---------------|---------------|---------------|-----------------|------------------|
| 楽しさ | あり | 7.7 ± 1.0 | | 8.8 ± 1.0 | | 9.2 ± 0.8 | | p < 0.001 | p < 0.001 | p = 0.002 | p < 0.001 | |
| | なし | 6.9 ± 2.0 | n.s. | 8.3 ± 1.5 | n.s. | 8.8 ± 1.6 | n.s. | n.s. | p = 0.001 | n.s. | p = 0.001 | n.s. |
| 生き生き | あり | 7.2 ± 1.6 | | 8.5 ± 1.1 | | 9.1 ± 0.9 | | p = 0.001 | p < 0.001 | p = 0.002 | p < 0.001 | |
| | なし | 6.9 ± 2.2 | n.s. | 7.7 ± 2.2 | n.s. | 8.6 ± 1.8 | n.s. | n.s. | p = 0.003 | p = 0.001 | p < 0.001 | n.s. |
| 混乱 | あり | 4.0 ± 2.4 | | 3.9 ± 3.2 | | 2.7 ± 3.1 | | n.s. | n.s. | p = 0.019 | p = 0.043 | |
| | なし | 4.8 ± 2.5 | n.s. | 5.3 ± 3.1 | n.s. | 2.7 ± 2.6 | n.s. | n.s. | p = 0.023 | p = 0.019 | p = 0.004 | n.s. |
| 緊張 | あり | 5.2 ± 2.5 | | 2.9 ± 2.9 | | 3.3 ± 2.9 | | p = 0.003 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | |
| | なし | 5.3 ± 2.1 | n.s. | 4.0 ± 3.3 | n.s. | 3.4 ± 3.2 | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | p < 0.001 | n.s. |
| 恥ずかしさ | あり | 5.4 ± 2.3 | | 2.9 ± 2.7 | | 3.2 ± 3.0 | | p = 0.001 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | |
| | なし | 4.8 ± 2.5 | n.s. | 3.6 ± 3.0 | n.s. | 2.8 ± 2.9 | n.s. | n.s. | p = 0.038 | n.s. | p = 0.025 | n.s. |

(平均値±標準偏差)

表 8 は、男女別に分析した結果を示したものである。「楽しさ」の「授業前」の時点において、女子の方が男子よりも明らかに「楽しさ」を感じており (p = 0.002)、変動パターンにも有意差が認められた (p = 0.005)。また、「混乱」の「発表前」で男子の方が女子よりも明らかに「混乱」を感じていた (p = 0.029)。

表 8. 男女別におけるダンスのイメージの推移

| ダンスイメージ | 性別 | 授業前 | 群間差 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 授業前 vs 発表前 | 授業前 vs 発表後 | 発表前 vs 発表後 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|---------|----|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|------|---------------|---------------|---------------|-----------------|------------------|
| 楽しさ | 男 | 6.8 ± 1.8 |] p = 0.002 | 8.6 ± 1.1 | n.s. | 8.9 ± 1.4 | n.s. | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | p < 0.001 | p = 0.005 |
| | 女 | 8.0 ± 0.9 | | 8.5 ± 1.4 | | 9.2 ± 0.9 | | n.s. | n.s. | p < 0.001 | p = 0.002 | |
| 生き生き | 男 | 6.6 ± 2.0 | n.s. | 8.1 ± 1.9 | n.s. | 8.7 ± 1.5 | n.s. | n.s. | p < 0.001 | n.s. | p = 0.001 | n.s. |
| | 女 | 7.5 ± 1.5 | | 8.3 ± 1.5 | | 9.1 ± 1.1 | | n.s. | p = 0.003 | p = 0.001 | p < 0.001 | |
| 混乱 | 男 | 4.8 ± 2.5 | n.s. | 5.4 ± 3.4 |] p = 0.029 | 3.1 ± 3.2 | n.s. | n.s. | p = 0.025 | p = 0.003 | p = 0.001 | n.s. |
| | 女 | 3.9 ± 2.4 | | 3.5 ± 2.8 | | 2.4 ± 2.6 | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | |
| 緊張 | 男 | 5.2 ± 2.1 | n.s. | 4.0 ± 3.3 | n.s. | 3.2 ± 3.1 | n.s. | n.s. | p = 0.033 | n.s. | p = 0.029 | n.s. |
| | 女 | 5.4 ± 2.5 | | 2.7 ± 2.8 | | 3.5 ± 3.0 | | n.s. | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | |
| 恥ずかしさ | 男 | 4.9 ± 2.4 | n.s. | 3.8 ± 3.2 | n.s. | 2.9 ± 3.1 | n.s. | n.s. | p = 0.026 | n.s. | p = 0.014 | n.s. |
| | 女 | 5.4 ± 2.4 | | 2.6 ± 2.4 | | 3.1 ± 2.8 | | n.s. | p < 0.001 | p < 0.001 | n.s. | |

(平均値±標準偏差)

(3) 舞踊の感情昇華に関する質問紙を用いた気分・感情評価

感情昇華の質問紙調査についての結果を図 6・7 に示す。質問 7「身体を大きく動かすのは恥ずかしかった」・質問 19「身体を動かすことが楽しいと感じた」・質問 26「身体で表現することは、リフレッシュするのに有効な方法だと感じた」以外の項目すべてで、発表前のスコアと発表後のスコアに有意差が認められた。質問 1「皆が見ている前で動くのは緊張した」の結果から発表前と比較して発表後に緊張感が増しており、質問 7 の恥ずかしさも発表前後で変化はなかったが、それ以外の項目については、発表後にすべて上昇していた。

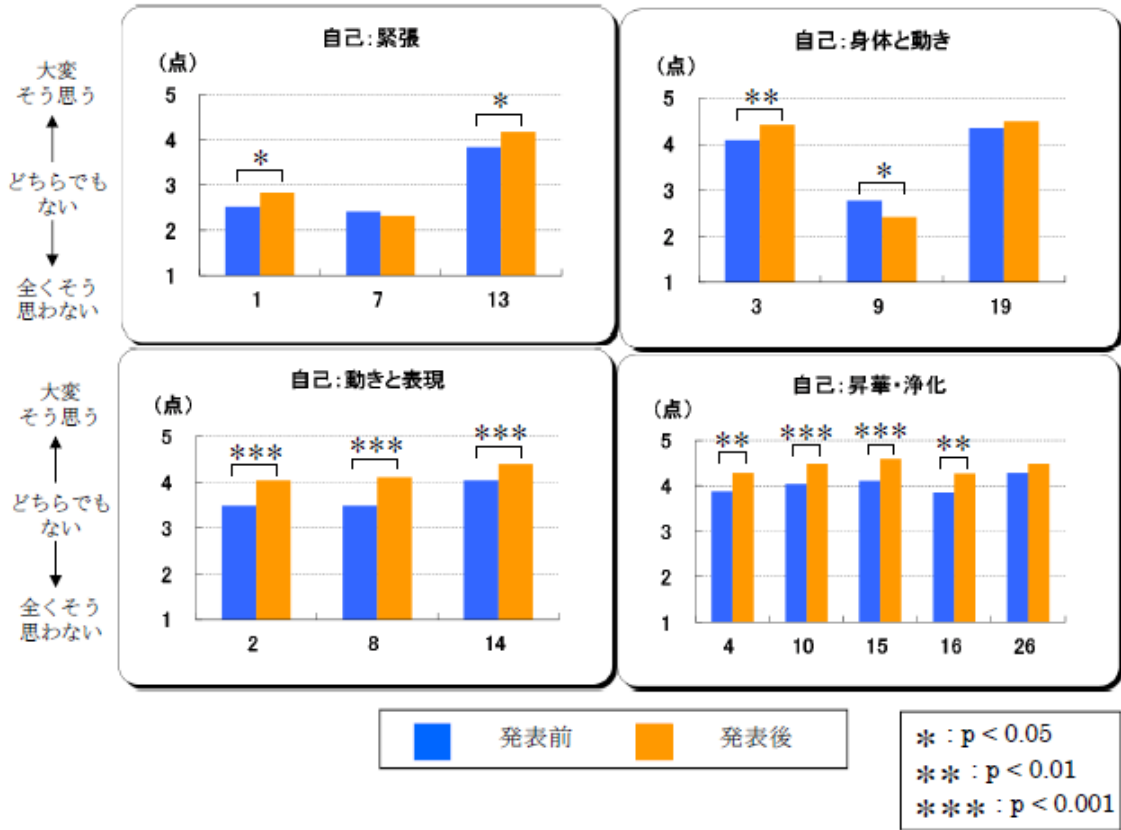


図 6. 自己に関する気分・感情評価の推移(自己)

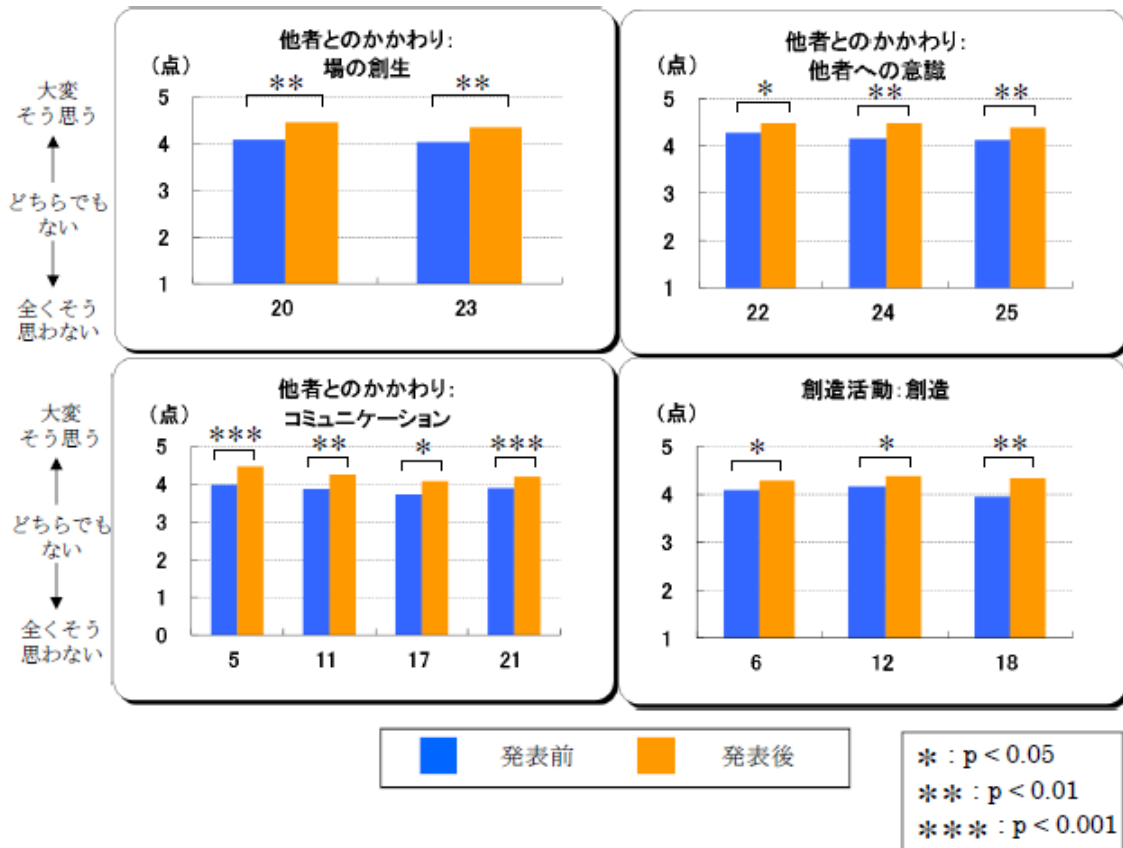


図 7. 他者とのかかわりと創作活動に関する気分・感情評価の推移

ダンス授業経験別に分析した結果、質問 6 の「動きを工夫する楽しさを感じた」の発表前 ($p = 0.013$)、質問 10「自然と笑顔になった」の発表後 ($p = 0.045$)、質問 14「動きで表現することが気持ちよかった」の発表後 ($p = 0.014$)、質問 15「踊り終わったあとは爽快感を感じた」の発表後 ($p = 0.002$)、質問 22「他者の表現の中に生き生きとした躍動感を感じた」の発表後 ($p = 0.02$)、質問 24「他者の動きの中に「その人らしさ」を感じた」の発表後 ($p = 0.015$)、質問 26「身体で表現することは、リフレッシュするのに有効な方法だと感じた」の発表後 ($p = 0.024$)で、いずれもダンスの授業経験があるという学生が、ない学生よりも有意にスコアが高かった。また、表 9 は、ダンス授業経験別の分析において、変動パターンに有意差が認められた項目について示したものである。質問 3「身体を十分に動かすことができた」($p = 0.033$)、質問 4「日頃のストレスが発散できた」($p = 0.007$)、質問 11「一緒に動いた人と、動きを通して気持ちが通じ合ったと思う」($p = 0.036$)、質問 14「動きで表現することが気持ちよかった」($p = 0.011$)、質問 15「踊り終わったあとは爽快感を感じた」($p = 0.013$)の項目で変動パターンに有意差が認められた。

表 9. ダンス授業経験別における気分・感情評価の推移

| 分類 | カテゴリー | 質問番号 | 質問項目 | 授業経験 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|---------|-----------|------------------|-----------------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------------|---------------|
| 自己 | 身体と動き | 3 | 身体を十分に動かすことができた | あり | 4.1 ± 0.9 | n.s. | 4.6 ± 0.7 | n.s. | p < 0.001 | p = 0.033 |
| | | | | なし | 4.2 ± 0.7 | | 4.3 ± 0.8 | | | |
| | 動きと表現 | 14 | 動きで表現することが気持ちよかった | あり | 4.0 ± 0.6 | n.s. | 4.6 ± 0.5 | p = 0.014 | p < 0.001 | p = 0.011 |
| | | | | なし | 4.0 ± 0.7 | | 4.1 ± 0.8 | | | |
| | 昇華・浄化 | 4 | 日頃のストレスが発散できた | あり | 3.8 ± 0.9 | n.s. | 4.4 ± 0.6 | n.s. | p = 0.001 | p = 0.007 |
| | | | | なし | 3.8 ± 1.0 | | 4.1 ± 0.8 | | | |
| | 15 | 踊り終わったあとは爽快感を感じた | あり | 4.1 ± 0.9 | n.s. | 4.8 ± 0.5 | p = 0.002 | p < 0.001 | p = 0.013 | |
| | | | なし | 4.1 ± 0.8 | | 4.3 ± 0.7 | | | | |
| 他者とのかわり | コミュニケーション | 11 | 一緒に動いた人と、動きを通して気持ちが通じ合ったと思う | あり | 3.8 ± 0.8 | n.s. | 4.3 ± 0.6 | n.s. | p = 0.001 | p = 0.036 |
| | | | | なし | 4.0 ± 0.8 | | 4.1 ± 0.7 | | | |

(平均値±標準偏差)

さらに、男女別に分析した結果、質問 1「皆がみている前で動くのは緊張した」の発表後 ($p = 0.039$)、質問 3「身体を十分に動かすことができた」の発表前 ($p = 0.026$)・発表後 ($p = 0.022$)、質問 5「一緒に動くことで、知らなかった人にも親近感が持てた」の発表前 ($p = 0.036$)、質問 6「動きを工夫する楽しさを感じた」の発表前 ($p = 0.035$)、質問 10「自然と笑顔になっていた」の発表後 ($p = 0.027$)、質問 12「他のグループにはないものを創ろうと努力した」の発表前 ($p = 0.018$)、質問 14「動きで表現することが気持ちよかった」の発表後 ($p = 0.032$)、質問 15「踊り終わった後に爽快感を感じた」の発表後 ($p = 0.028$)、質問 16「自分の内にたまったものを外に出す(浄化する)心地よさを感じた」の発表前 ($p = 0.017$)、質問 19「身体を動かすことが楽しいと感じた」の発表前 ($p < 0.001$)・発表後 ($p = 0.012$)、質問 20「このクラスでは自分の自由な表現を受け容れてもらえる」の発表前 ($p = 0.048$)、質問 22「他者の表現の中に生き生きとした躍動感を感じた」の発表後 ($p = 0.007$)、質問 24「他者の動きの中に「その人らしさ」を感じた」の発表前 ($p = 0.014$)・発表後 ($p =$

0.034) 質問 25「他者の動きの中に、その人の「喜び」を感じた」のは発表前 (p = 0.049)・発表後 (p = 0.025)、質問 26「身体で表現することは、リフレッシュするのに有効な方法だと感じた」の発表前 (p = 0.006)・発表後 (p < 0.001) で、いずれも女子が、男子よりも有意にスコアが高かった。なお、いずれの項目も変動パターンには男女差は認められなかった。

さらに、ダンス授業経験があると答えた学生 (34 名) を対象に、男女別 (男子:11 名、女子 23 名) に同様の分析を行ったところ、質問 1「皆が見ている前で動くのは緊張した」の発表後 (p = 0.013)、質問 3「身体を十分に動かすことができた」の発表前 (p = 0.003)、質問 12「他のグループにはないものを創ろうとした」の発表前 (p = 0.004)、質問 24「他者の動きの中に「その人らしさ」を感じた」の発表前 (p = 0.019)、質問 25「他者の動きの中に、その人の「喜び」を感じた」の発表前 (p = 0.028) の項目で、女子のスコアが男子よりも有意に高かった。また、質問 5「一緒に動くことで、知らなかった人にも親近感が持てた」の発表後の項目においては、男子のスコアが女子よりも有意に高かった (p = 0.027)。また、表 10 は、変動パターンに有意差が認められた項目について示したものである。質問 1「皆が見ている前で動くのは緊張した」(p = 0.033)、質問 3「身体を十分に動かすことができた」(p = 0.014)、質問 4「日頃のストレスが発散できた」(p = 0.031)、質問 8「自分を思い切り出すことができた」(p = 0.008)、質問 9「身体を動かすことにぎこちなさを感じた」(p = 0.048)、質問 12「他のグループにはないものを創ろうと努力した」(p = 0.005) の項目で変動パターンに有意差が認められた。

表 10. ダンス授業経験がある学生の男女別における気分・感情評価の推移

| 分類 | カテゴリー | 質問番号 | 質問項目 | 性別 | 発表前 | 群間差 | 発表後 | 群間差 | 群内比較 (ANOVA) | 変化の比較 (ANOVA) |
|-------|-------|-----------------------|--------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------------|---------------|
| 自己 | 緊張 | 1 | 皆が見ている前で動くのは緊張した | 男 | 2.5 ± 1.3 | n.s | 2.1 ± 1.1 | p = 0.013 | n.s. | p = 0.033 |
| | | | | 女 | 2.6 ± 1.2 | | 3.1 ± 1.0 | | n.s. | |
| | 身体と動き | 3 | 身体を十分に動かすことができた | 男 | 3.5 ± 0.8 | p = 0.003 | 4.4 ± 0.9 | n.s. | p = 0.002 | p = 0.014 |
| | | | | 女 | 4.4 ± 0.7 | | 4.6 ± 0.6 | | p = 0.016 | |
| | 動きと表現 | 9 | 身体を動かすことにぎこちなさを感じた | 男 | 2.8 ± 0.8 | n.s | 2.1 ± 1.1 | n.s. | n.s. | p = 0.048 |
| | | | | 女 | 2.5 ± 1.2 | | 2.6 ± 1.0 | | n.s. | |
| 昇華・浄化 | 8 | 自分を思い切り出すことができた | 男 | 3.2 ± 0.9 | n.s | 4.4 ± 0.7 | n.s. | p < 0.001 | p = 0.008 | |
| | | | 女 | 3.7 ± 0.8 | | 4.2 ± 0.7 | | p = 0.009 | | |
| 創造活動 | 12 | 他のグループにはないものを創ろうと努力した | 男 | 3.7 ± 0.6 | p = 0.004 | 4.6 ± 0.7 | n.s. | p = 0.005 | p = 0.005 | |
| | | | 女 | 4.4 ± 0.5 | | 4.4 ± 0.5 | | n.s. | | |

(平均値 ± 標準偏差)

3. 発表リハーサルと発表本番の作品の比較

以下は、同じ作品の発表リハーサル (15 回目の授業・[動画 1](#)) と発表本番 (16 回目の授業・[動画 2](#)) の映像である。発表リハーサルは発表本番と同様に、アナウンス、音響、照明を用いて行い、作品の内容も同じであり、違いは観客がいるか否かである。「創作ダンス発表会」本番の観客数は、1 回の公演あたり約 100 名であった。映像から明らかに発表本番のダンスの方が、表情が生き生きとし、動きも大きくダイナミックに踊れていることが見て取れる。

V. 考察

本研究では、体育系大学における「創作ダンス」授業内での「発表」前後での気分や感情の変化を検討した。

ダンスの好嫌度に関しては、①ダンスを踊ること、②ダンスを創ること、③ダンスを観ることの全ての項目において、授業前と発表前後の値に有意差が認められたが、発表前後では有意差は認められなかった。また、授業前、発表前、発表後を通して、ダンス授業経験ありと答えた学生の方がなしと答えた学生よりも、①ダンスを踊ること、②ダンスを創ること、③ダンスを観ることのどの項目においても、ダンスが好きである傾向が強いことが認められた。立木(1995)は、大学生を対象にした調査の中で、ダンス授業経験者の方が、ダンスを「踊る」「観る」ことに対して好意的であると報告している。本研究の結果においても同様に、特に「踊る」「観る」の項目で、ダンス授業経験の有無によって、有意差が認められており、ダンスの好嫌度には、大学以前のダンス経験が影響を及ぼす可能性が示唆された。さらに、女子学生の方が男子学生よりも、すべての項目において、ダンスが好きである傾向が強いことが認められた。猪崎ほか(2013)は、中学生を対象とした調査において、ダンスをすることに対する態度もダンスを見ることに対する態度も女子の方が男子よりもポジティブであること報告している。本研究の結果においても、同様の傾向が認められたことから、大学生においても、ダンスの好嫌度には、男女差が影響を及ぼす可能性が考えられた。一方で、ダンス授業経験がある学生のみを対象に、男女別に検討した結果、授業前、発表前、発表後のスコア、変動パターンに男女差は認められなかった。このことから、より早い年齢の段階からダンスの授業に触れることで、男子も女子と同様にダンスを好きと捉えることができる可能性が示唆された。しかしながら、いずれの分析においても、ダンスの好嫌度は、ダンス「発表」の体験によって影響は受けにくいと考えられた。

ダンスに対するイメージについては、全 16 回の授業を通して、「楽しさ」「生き生き」といったイメージが増し、「混乱」「緊張」「恥ずかしさ」が低下していた。とりわけ「発表」の体験が大きく影響していたのは、「楽しさ」「生き生きする」「混乱」といったイメージであった。大庭(2000)は、毎時間の小さな見せ合いの中からも、他のグループ発表を見ることによって、他のグループを受け入れ、感心し、また、自分たち自身の出来ばえを確認し、自信を深めたり、反省したりしながら試行錯誤を繰り返し、どう評価されるのか、何が人に受け入れられるのか、他の種目とちがって不安のある中で、観ることによって一人一人の中に評価の基準が出来上がっていく、と述べている。また、どんなに小さな1時間毎の見せ合いでも、その緊張感を体験し、はずかしがらずに精一杯表現することが他への感動を生み出すことを実感し、グループ、クラス、学年の発表会へとすすんでいくに従って更に次への意欲を生み、幅広い表現のあることを知り、自己の視野を広げるのである、とも述べている。松本(1992)は、ダンスの学習の過程では、「踊る」「観る」は評価の働きを合わせもっているため、ひとりで踊りながら、友だちと相互に見合っ、表現を確かめ選んでひとまとまりのものにしたり、より良いものに高めたりできる、と述べている。本研究の対象者においても、「創作ダンス発表会」以前のダンス練習室で行う授業の中で、ほぼ毎回、「みんな違ってみんないい」「仲間の良い動きや表現に目

を向けよう」といった言葉かけをしながら、「見せ合い」の活動を行っていた。このような経験の積み重ねが、ダンスイメージをより良い方向へ導き、最後の「創作ダンス発表会」という「発表」の体験を通して、よりポジティブなイメージへ改善したものと考えられる。また、ダンスの授業経験は、ダンスイメージに大きく影響を与えなかった。男女別に比較してみると、授業前の「楽しさ」や発表前の「混乱」の項目で、男子に比べ女子の方が良いイメージを持っていることが認められたが、発表後には、いずれの項目においても男女差が消失していた。猪崎ほか(2013)は、中学生を対象とした調査において、ダンスの授業後の感想で、男子が女子と比較して、「思っていたより楽しかった」のような「意外性」が約 2 倍認められたと報告している。本研究においても、「楽しさ」の項目で、授業前に男子の方が女子よりも明らかに低いスコアを示していたにも関わらず、発表前には、男子のスコアが改善し、男女ほぼ同等のスコアとなった。このことから、ダンスに対してネガティブなイメージを持つ男子においても、ダンスの授業を通して、ダンスイメージをより良い方向へ導くことができる可能性を示唆できるものと考えられる。一方、「楽しさ」「生き生き」の項目では、女子のみで発表前後で有意な上昇が認められ、「混乱」の項目では、男子のみで発表前後で有意な低下が認められたことから、ダンスの「発表」体験は、女子においてはポジティブなイメージをより上昇させ、男子においてはネガティブなイメージをより低下させる可能性が示唆された。従って、ダンスの「発表」体験がダンスイメージに与える影響に関して、男女差が存在する可能性が示唆された。

原田(2006)は「感情のはけ口」としてのダンスの機能を、舞踊の「内的感情の昇華」と呼んで、「自己の内側に生じた様々な感情を、自己の外に創造的な形として出す(表現すること)」と定義した。その「内的感情の昇華」の具体的な機能を明らかにするための質問紙を用いて量的な検討を行った結果、『自己』に関わる項目は授業の初期段階から高い評定値を示し、ダンスの「動き」そのものの体験が身心を外に向けて拓かせる働きを持っているとしている。そして、その後、動きが自己の表現となっていく学習の過程を通して、『他者』との「コミュニケーション」やそこから創生される「場」が自己の内的感情の昇華を促進し、より良い「創造」活動を目指す段階へと至ることを確認している(原田、2006)。本研究においては、質問紙調査を実施した時期が 15 回目(発表前)と 16 回目(発表後)の授業ということもあり、全体的に評定値は高かったが、ほとんどの項目で発表前と比較して発表後に有意な上昇が認められた。「自己」に関わる「身体を動かすことが楽しいと感じた」「身体で表現することは、リフレッシュするのに有効な方法だと感じた」の 2 項目については発表前後で有意差が得られなかった。これは、15 回目の時点で評定値が 4.4 ± 0.7 ・ 4.3 ± 0.8 と非常に高い値を示していたことが原因であると考えられる。また、これは、「自己」に関わる項目は授業の初期段階から高い評定値を示すとした原田(2006)の報告とも一致する。「皆が見ている前で動くのは緊張した」の項目は発表後に有意に上昇しているが、これは、発表本番の独特の雰囲気による緊張感を感じて踊っていたことが原因だと考えられる。しかしながら、その他の、「自己」「他者」に関わる項目について、発表後に有意に値が上昇したことは、ダンスの「内的感情の昇華」が「発表」の体験によってより促進される可能性を示すものと考えられる。一方で、ダンスの授業経験がある学生は、多くの項目で授業経験がない学生よりもスコアが高く、変動パターンに有意差が見られた 5 項目に

については、いずれも、授業経験がある学生のみ発表後に有意な上昇が認められた。男女別の解析においては、多くの項目で男子よりも女子の方がスコアが高かったが、変動パターンに男女差は認められなかった。そこで、ダンス経験があると答えた学生を対象に、男女別に解析を行ったところ、「皆が見ている前で動くのは緊張した」「身体を動かすことにぎこちなさを感じた」の 2 項目においては、有意差は認められなかったものの、男子は発表後に低下し、女子は上昇していた。さらに「身体を十分に動かすことができた」「自分を思い切り出すことができた」「日頃のストレスが発散できた」「他のグループにはないものを創ろうと努力した」の 4 項目については、男子の上昇幅が女子の上昇幅よりも明らかに大きかった。このことから、授業経験がある男子においては、ネガティブな感情が軽減し、ポジティブな感情が増加する可能性が示唆された。従って、ダンスの「発表」体験が内的感情の昇華に与える影響に関して、ダンス授業の受講経験および男女差が存在する可能性が示唆された。

麻生(1996)は、舞踊鑑賞におけるコミュニケーションでは、作者・演技者と観賞者は、それぞれのお互いの存在を前提としながら、発信と受信がそれぞれ一方的かつ同時に進行し、送信内容と受信内容が必ずしも一致しない点を舞踊鑑賞におけるコミュニケーションの特異性であると述べている。その上で、会場は、作者・演技者と観賞者が作品を上演・観賞するという、それぞれの独自の創造的活動に対して非日常性が確保された、両者に共通する県境として、コミュニケーションの成立に必要な空間であるとしている。本研究において、「発表」の体験が、様々な気分や感情に影響していることは、「創作ダンス発表会」がいつものダンス練習室とは違う講堂で行われたこと、観賞者がいつも「見せ合い」をしている仲間だけではないという、「非日常性」の強い空間で行われたことが大きく関連している可能性が考えられる。今後は、授業内での「見せ合い」レベルでの「発表」と授業のまとめとして非日常空間で行う「発表」について比較検討し、「発表」の意義について、より考察を深めたいと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、体育系大学の選択授業の受講生を対象としていることから、教員免許取得希望者やダンスに興味がある学生が多く履修している可能性が考えられ、体育系大学の学生全体の傾向を反映していない可能性が考えられる。また、使用した「舞踊の感情昇華」に関する尺度においては、先行研究において 17 名という少数の人数に対して実施されたものであることから、本研究における使用の妥当性に関しては検討の余地があると考えられる。今後は、調査対象者を拡大すると共に、大学生以外の対象者でも検証を行い、また、使用する尺度についても、さらに検討を重ねていきたい。

VII. まとめ

本研究では、体育専攻学生における「創作ダンス」授業内での「発表」前後での気分や感情の変化を検討した。その結果、ダンスの好嫌度は、ダンス「発表」の体験によって影響は受けにくい可

能性が示唆された。また、ダンス「発表」の体験は、緊張感や恥ずかしさについては緩和されないが、ダンスに対する「楽しさ」や「生き生きする」といったポジティブなイメージをより上昇、「混乱」といったネガティブなイメージを低下させた。さらに、自己に関わる「身体と動き」「動きと表現」「昇華・浄化」、他者とのかかわりに関係する「場の創生」「他者への意識」「コミュニケーション」や「創造活動」に関わる感情を上昇させる可能性が示唆された。また、ダンスの好嫌度やダンスに対するイメージ・気分・感情にはダンス授業の受講経験や男女差が影響を与える可能性が示唆された。

従って、本研究を通して、ダンスの「発表」体験が、学習者の様々な気分や感情に好影響を与える可能性が示唆された。

VII. 文献

- ・ 麻生和江(1996)創作ダンス学習における作品発表会の指導についての一考察－発表会会場の形状と創作ダンスに対する視座との関わりから－. スポーツ教育学研究. 16(2):137-143.
- ・ 麻生和江(1992)創作ダンスの学習における発表会の意義について. 九州体育学研究. 7:1-9.
- ・ 千住真智子(1994)エアロビックダンスの魅力(Ⅱ)特に初心者にとって発表の機会をもつことの意味について. 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門:教育科学. 42(2):245-253.
- ・ 原田純子(2006)舞踊における“感情昇華”の機能に関する考察－質問紙調査による量的検討の試み－. 大阪女学院大学紀要. 3:67-77.
- ・ 猪崎弥生、酒向治子、永田麻里子、田中俊之、米谷淳(2013)中学生のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価:質問紙調査を基に. 御茶ノ水女子大学人文科学研究. 9:15-24.
- ・ 松本千代栄(1992)第5章ダンス学習の発表と鑑賞.ダンスの教育学 3 創作ダンスの基本的段階、初版、松田岩男総監修、徳間書店.pp.183.
- ・ 松本富子(1992)第5章ダンス学習の発表と鑑賞 第2節鑑賞と評価.ダンスの教育学 3 創作ダンスの基本的段階. 初版、松田岩男総監修、徳間書店.pp186-187.
- ・ 文部科学省(2008a)中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房. pp.1-14.
- ・ 文部科学省(2008b)中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房. pp.118-133.
- ・ 大庭千世子(2000)高等学校のダンス ダンスの発表会--無理なくダンス発表会にとりくむために. 女子体育. 42(2):45-48.
- ・ 立木正(1995)大学生のダンスに対する意識と活動の実態に関する調査研究:東京学芸大学の学生を中心として. 東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・健康・スポーツ科学. 47:269-275.
- ・ 山崎朱音(2013)ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方 : 静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して. 静岡大学教育実践総合センター紀要. 21:73-81.